



# 大磯の一茶と呼ばれた文筆家

下

―町民は宰相も、その天敵も敬愛した―

ノンフィクション作家 三山 喬

『東京日日新聞』は明治五（一八七二）年創刊、『毎日新聞』の前身となった日刊紙だ。高田保は昭和八（一九三三）年、有望な若手作家のひとりとして大宅壮一や木村毅らとともに学芸部の「社友」（一種の契約記者）となり、軽妙な雑文を数年間、同紙に執筆した。

## 名コラム誕生

この『東日』が『大阪日日』と統合し、現在の『毎日新聞』に名前を変えたのは戦時下の昭和十八年。そして終戦から三年後に『東京日日』という、昔の名で系列夕刊紙を出したのは、深刻な紙不足のなか、政府から新聞用紙の割り当てを受けるのに、新興紙の創

刊が有利だったためだ。

しかし戦後の混乱期、事態は二転三転した。翌年には『毎日』本体が夕刊も刷り始め、競合する夕刊紙『東日』は娯楽読み物に特化した媒体に性格を変えた。そして六年後、同じ毎日系『スポーツニッポン』に事実上吸収される格好で、『東日』の刊行は終了した。

つまり戦後の『東日』はごく短命の娯楽媒体に過ぎなかったのだが、高田が執筆を任された「ブラリひょうたん」は一面の看板コラムとして、全国紙の「天声人語」（朝日）や「余禄」（毎日）、「編集手帳」（読売）に負けない足跡を戦後史に刻んだのだった。

媒体の性格上、世論への影響力は限定されていたが、筆者の深い眼差しがある種の文学性にまで昇華された

コラムとして、同時代の多くの文化人がそのクオリティを称えた。

『高田保伝』の著者・榊原勝は「死んでから人気が出たのは、石川啄木と高田保だといわれる」と書き、「戦前彼の著書は売れないので有名だったが、戦後『ブラリひょうたん』で一躍人気者になった」「敗戦日本人の心の焼け野原において、早春のツクシのように、かれ独特のヒューマニズムが芽を吹いたのである」という大宅壮一の言葉を紹介した。

新聞連載で世評の高かったこの随筆は当時単行本としても愛読されたわけだが、死後四半世紀を超えたる休眠のあと昭和五十三年四月に再刊行されるに至った。再刊されるや、テレビ新聞の好評をえて、たちまち重版をきたし、逸品という名のいつわりでなかったことを裏書きした。

昭和二十三年十二月十七日に始まった高田のコラムには、当初「あとさき雑話」というタイトルが付いていたが、翌月の元日号から「ブラリひょうたん」と改題した。

結核を患う高田はしかし、スタートから一年八ヶ月が過ぎた二十五年七月に咯血、四ヶ月間コラムを休載する。十一月、再びペンをとったものの、翌十二月から二十六年二月にかけても休載。再々スタートも約ひと月で大咯血に見舞われて打ち切れ、そのまま十一ヶ月後の二十七年二月、高田は息を引き取ったのだった。

## 吉田茂の白足袋とゾーリ

占領期後半の足かけ四年間、実際には断続的に二十ヶ月分の『東日』に「ブラリひょうたん」は掲載され、その回数は計五二八回に及んだ。

連載が開始されたのはそのふた月前、「昭電疑獄」（復興金融金庫の融資をめぐる贈収賄事件）により芦田均内閣が倒れ、野党・民主自由党総裁の吉田茂がこれに代わる第二次吉田内閣を立ち上げたタイミングだった（第一次吉田内閣は二十二年五月、旧憲法下につくられた最後の内閣で、翌年五月まで続いた）。しかし芦田内閣で与党だった勢力が吉田の不信任案を可決、高田のコラムが始まった六日後には、これを受け吉田が衆議院を解散す